

「上陸」風景(写真集「土浦」市川彰編より)」と現在の一本松



## 霞ヶ浦(その12)～予科練生の休日～

「明日は外出です。金を1円もって、饅頭食って汁粉を食って、大福食って芋食って、アンミツ食ってあべかわ食って、倶楽部へ行って火鉢にでもあたっている予定です。」(甲飛5期、福山資さんが母親に送った手紙より抜粋)。厳しい訓練に明け暮れていた予科練習生たちにとって、最大の楽しみが日曜日の外出でした。家族や親戚との面会、指定食堂やクラブ(倶楽部)でくつろぎ、買い物をしたり、短い自由時間を楽しんでいました。そんな彼らを、土浦や阿見の人々は暖かく見守り、心づくしのもてなしをしていました。

## 上陸

「上陸」という言葉は軍艦生活から生まれた海軍用語で、日帰り外出を「上陸」と言い、宿泊を伴う外出を「入湯上陸」と呼んでいました。予科練入隊直後は、軍人としての基礎教育や躰を身につけるまで上陸は許されず、入隊3ヶ月後から日曜日のみ、上陸が許可されました。この上陸が14〜19才の予科練の少年たちにとって、最大の楽しみでした。予科練生の上陸先は阿見や土浦の町でしたが、航空隊では厳しい制約を設けて、行動範囲や区域、上陸の時間が制限されていました。土浦の町にも、立入禁止区域が設けられていて、限られた地域にしか行けません。桜川沿いの二業地(料理屋と芸者屋の二業)がともに営業することを許された地域であった栄町(現桜町)は、立入禁止区域であり、新川以北の真鍋方面も立入禁止区域で、町の中には監視の兵隊が巡回していました。さらに許可された区域内でも自由に行動することができません。食堂にしても予科練指定食堂が定められ、それ以外の店で食事することは禁じられていました。そのため航空隊では、予科練生の憩いの場所として特別契約をした民家(「クラブ」と称していました)を指定して、上陸の時は指定食堂やクラブで一日を過ごすようにしていました。また亀城公園が散策によく利用されていました。上陸の日には故郷の家族や親戚との面会の日でもあり、土浦の町は予科練生と面会に来た家族で賑わっていました。

日曜日の朝、8時から30分間の温習(自習)の後、上陸を希望する者は朝礼場

において午前9時、上陸整列を行い、服装点検を受け、風呂敷に包んだ海軍弁当(二合飯とオカズが入ったドカベン)を小脇に抱え、分隊ごとに隊列を組んで隊門を出た後、解散して各個に、またグループ毎に自由に行動しました。予科練生は阿見から土浦まで、乗物に乗ることは禁じられていたので、全員徒歩で来ました。さらに予科練生は海軍道路(旧国道125号線)ではなく田圃の中の道を通ってきました(海軍では階級別の厳しい礼儀があり、1階級でも上の者への敬礼を欠かすことはできないので、海軍道路を歩くと、同じく上陸する土浦航空隊や霞ヶ浦航空隊の上官にいちいち敬礼をしなければならず、その煩雑さに参っていました)。航空隊を出ると、目標は大岩田の一本松(現在は3代目)で、訓練の時の目標にもなっていました(外出を終えて帰隊する際には一本松が見えると、明日からの猛訓練を思い浮かべたそうです)。一本松の所から備前川の土手を通り、桜川へ出て、常磐線の鉄橋をくぐり、三好橋(仮橋)を渡って土浦駅に到着します。面会に来ている家族や親戚がいれば、連れだつて指定食堂やクラブへ向かいました。

## 指定食堂

土浦に指定食堂が定められたのは1941(昭和16)年。大和町の富久善本店(和食)、大和そば店、本町の豊島百貨店食堂(和洋食)、中城町の保立食堂(和食)、吾妻庵そば店、内西町の保長食堂(甘味食)、やぶ広そば店の7軒でした。その他、大和町の伊勢屋菓子店などが「海軍指定店」になっていました。当時、保立食堂を営

んでいた保立俊一氏(中学31回)は予科練生の様子を次のように回顧しています。

「朝9時に隊を出て、土浦には10時近くに到着、亀城公園あたりを散策して、お昼ころ店にやって来ます。帰隊まで3時間くらいありますから、よく食べました(帰隊時刻は午後4時、土浦から阿見まで予科練生たちの足で約1時間、それで3時くらいに土浦を発っていました)。まず丼物や甘味を食べて、持参した弁当を食べるといふ順番だったと思います。その当時のメニューの値段は予科練生向きに決めました。20銭から25銭の範囲内です。そのメニュー、予科練の子供たちが好きなメニューという丼物で、天井とか親子丼とか玉子丼とか、それから鰻丼とかそういう丼類がよくできましたが、上限25銭、あとは20銭くらいの値段でした。しかし予科練生は、金もあまり持たされなかったようで、決まったものしか食べられなかったのではないのでしょうか。上陸できて予科練生には遊ぶ場所がありません。ですから店に入ると帰りまでゆっくりしてしまいます。だからうちは店全部を開放していただきました。2階が4部屋、だいたい50畳くらいの広さがありました。朝来ると、ここへ来て一日過ごしている子供らが多かったです。1942(昭和17)年頃になると、家族の面会者が非常に多く来ました。家族の方が面会に来ると、子供たちに食べさせようとたくさん土産をもってきました。2階で友達同士の親達のつきあひも生まれて、非常にいい付き合いができたのではないのでしょうか。」

(「続・阿見町と予科練」予科練の回想)

